W450×H450

消渇・りん病・腎虚・腎張り
泌尿器の病気、性の病気

消　渇

「消渇（しょうかち）」は、現在の糖尿病で、のどが渇いて大量に水を飲むことから、飲水病、口渇病、かわきの病と呼ばれました。平安時代には藤原道長もかかりました。

江戸時代には、この病気にかかった人の尿が甘いことがすでに知られていました。治療法がなかった時代には、腫れ物が治りにくかったり、失明することもありました。

りん病

現在では「淋病」は性感染症を指しますが、江戸時代までは頻尿（ひんにょう）など膀胱炎や腎臓疾患の尿の症状を指しました。

腎虚（じんきょ）と腎張り（じんばり）

「腎虚」の「腎」は腎臓のことではなく、人間が生きるためのエネルギーである「精気」を作る場所のことです。腎虚は陰萎（いんい）だけでなく、精神の疲労や耳鳴りなども症状全体を指しましたが、次第に性欲減退を意味するようになりました。「腎張り」は、腎虚とは逆に、性欲過多の状態を指しました。